

調査研究報告書

入院患者の早期離床・生活行動拡大に ともなう姿勢に関する研究

代表 大河原 千鶴子 (杏林大学保健学部看護学科)
委員 酒井 一博 (労働科学研究所労働環境保健研究部)
新藤 悦子 (三井記念高等看護学院)
谷口 珠実 (杏林大学保健学部看護学科)
鳥居塚 崇 (慶應義塾大学理工学部)

1996

財団法人 姿勢研究所

1 はじめに

近年医療技術の進歩により、入院患者とくに術後患者の早期離床の利点として呼吸器合併症の予防、胃・腸管蠕動運動の促進、関節拘縮・筋肉萎縮の予防、末梢循環不全・静脈血栓・褥創の予防、回復への意欲を高めるなどとされ、早期離床・日常生活行動拡大が奨励されている。

また、社会の高齢化などにより厚生省が打ち出した医療費削減策、寝たきり防止が課題となっている。

これまで姿勢と健康に関する研究、著書はかなりみられるが、患者の早期離床・日常生活行動拡大にともなう姿勢については、離床の時期と方法について患者にとらせる体位の順序として示されたものが多く、患者の生活行動の中での姿勢として捉えたものはほとんど見られない。

そこで我々は、入院患者の中で早期離床が必要な開腹手術を受ける患者を対象として、術前・術直後・回復期について縦断的、継続的に経過を追って調査し、患者の早期離床・生活行動拡大の観点から、患者の取る姿勢、行動内容、行動場所について患者側から把握することにした。

その上で各時期における患者が取りやすい姿勢や行動の特徴を明らかにし、患者にとって安楽で回復・自立を促す援助、快適な入院生活を支援するための看護方法の改善および病院環境作りを目的として本研究を行った。なお、本研究の目的と流れは図1.1に示す通りである。